

開卷驚奇俠客傳

第壹集

式

1245
1



門八 13

號 1245

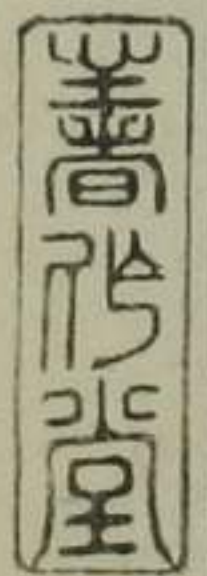
曲亭主人著 溪齋英泉畫

開卷敬馬奇俠客傳

第壹集

天保重光單闕
羣玉堂精刊



俠客傳第一集自序 

譏護
如非

老氏曰大道廢有仁義仁義者道之異稱也
 而有似而非者故韓非比儒俠擯斥之曰儒
 以文亂法俠以武犯禁二者皆譏而學士多
 稱於世云夫俠之為言彊也持也輕生高氣
 排難解紛孔子所謂殺身成仁者是已司馬
 遷及傳游俠其序援韓子且曰季次原憲問
 巷人也讀書懷獨行君子之德不苟合當世
 當世亦笑之又曰今游俠其行雖不軌於正

史家傳第一集卷一

乙 羣玉堂印

義然其言必信其行必果已諾必誠不愛其
軀赴士之阨困既已存以死生矣而不矜其
能羞伐其德蓋亦有足多者此有憤激而言
之是以其語厚而意深也斑固不原此意以
其進奸雄譏之可謂誤矣今于彼書檢之則
有延陵孟嘗春申平原信陵之徒皆卿相富
厚之俠也至如閭巷之俠又有朱家田仲王
公劇孟郭解數人自漢而後迨唐有劍俠有
女俠小說所載不遑毛舉也

國朝自古必有其人在焉但無論記傳載之
以余所聞近世有大鳥居逸平關東小六幡
隨長兵及號茨城草袴白柄大小神祇者皆
是閭巷之俠而其所爲或未必合於義帝立
氣齊作威福結私交以立彊於世者也較諸
古者道德之士不動聲色消宇內之大變者
相去非唯宵壤而已然氣豪以此至捍當世
之兇暴此戰國之餘習未改其私義廉潔以
有然也使當時無此人則士風自是衰俠客

之義曷可少哉。余有感焉，而無所憤激，不激不憤，猶且傳俠客，所以然者，何也？蓋以仁人抱道，猶不免菑，是故新田殂于足羽，楠氏陣歿，湊河大凡，此二公誠忠與日月爭光，德義流芳，而不旣惜乎枝葉，不再振榮，枯得喪與南朝終始矣。是以世人不平，以爲遺憾，余之固陋，不敢自料，寧思欲排其難解，其紛叨，補舊記之闕，文慢載野乘所未言，演義立傳，以快_中人之心。若夫興絕顯隱，非游俠則其事不

潔，使人心愉快，非寓言，乃其談不博，無財而能俠，其俠此益竒也。用滑稽善談，罔不出人意，表宜名不虛立，書不虛行，竊有賴于此。又惡問虛之與實哉，是書數十卷，然後可以結局。今茲所著才五卷，是爲第一集，其第二集以下，應陸續刊行。云浪華書賈羣玉堂與江戶書賈文溪堂相謀，乞余之著，三四年矣。此塞其責者，及刻成，聊亦識歲月。

天保二年端午前一日

曲亭蟬史撰



開卷驚奇俠客傳第壹集總目錄

卷

第壹回

製青囊 著演購 獨體
封白紙 英直託 孤君

卷

第貳回

依遺訓 賢童知 跣踏
迎旅櫬 義士憐 母子

卷

第參回

照黑夜 螢火導 海濱
誇明察 鼠輩被 恥辱

卷

第肆回

陰德入 老御得 奴婢
陽卜綠 鬪鷄倡 主僕

卷

第伍回

謁林住 南將感 舊綠
演便宜 老尼薦 村酒

三

第陸回

福草村 三兇奏 奇功
釀藥酒 郡領詳 來歷

卷

第柒回

七里濱 洪波洗 衆惡
千葉城 土療埋 潮毒

卷

第捌回

啓衣箱 小六得 遺書
救癩疾 著演失 銅笄

卷

第玖回

御士二 遇癩病 人
光棍初 懺悔舊 惡

卷

第拾回

相摸川 小六視 橫死
遊行寺 著演葬 螟蛉

第一集總目錄終

本集起南朝元中九年至北朝應永十八年
春秋大九二十箇年小說第二集陸續刊行

のりまのふいとあはれのふ
野上史著演

豪俠氣節其名若雷
虚已博愛仗義散財
寡欲自守不容禍胎
至信共患旅櫬得回
一堆枯骨初睡夜臺
空緘屈處克保嬰孩

野上史著演
[Seal] [Seal]



ふぢさへの
藤澤
か
晚稲

像替第壹

たのみやれそゝわら
る乃迹をわ
るまほ美川終
まの唇の糸
質英直 [Seal] [Seal]

このうつく
館大六
ひとま
英直



まごやのめし
客店目四郎

像替第貳

大正十一年三月
四
大正十一年三月

脇屋右少將義隆



精忠三世
傳迄是君
南史雖絶
猶有遺文

贊脇屋少將 雕窓

藤白隼人正
安同

像贊第一

草ふみひのり
はむ月の露は
海あや入るむ
此の流きこも

畑六郎二
時種

贊新田主僕 窓



新田
左少將
貞方

像贊第四

千代米介
兼胤

順逆如、因人多、捷天
巧恣權、詐藥鳩、仆仙
勢利資、榮惡冠、當年
皇天既定、冥罰豈愆

雷
天



妙算
錢卜

像替第五

たつらめろおもやつれら
あけまれのあろく
かろくまのいろはのね
替小六並母屋

姉
母屋

館小六
助則

像替第六



俠客傳第一輯卷一

六

羣玉堂印發

俠客傳第一集列傳姓名目錄

將相 新田貞方 脇屋義隆 足利滿兼 足利持氏

上杉憲定 千葉介兼胤

武士 野上史著演 館大六英直 畑六郎二時種 上泉秀武

鳥山七郎 船田小二郎 堀口五郎 江田藏人 高柳兵庫 藤白安同

田子勇傳二 荒海灘藏 荒海船藏 野上奴婢之助 館小六助則

婦人 晚稻 母屋 信夫 女僧妙算

市人 逆旅主人肝八 姿鏡屋甲 紅粉阪小正二 臺町猪三太

相摸川 篙師 伏 客店目四郎

奴隸 字六 画七 畑平 畔藏

通計三十有五名第一集姓名目錄終

開卷驚奇俠客傳第一集卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回 青囊の製りて著演觸體を購ふ 白紙を封じて英直孤君を託す

鹿苑院足利義滿相國の將軍たり。應永の年秋と。相摸州高座郡藤澤道場の左盡頭野上史著演と吸做し。一個の御士ありけり。その祖曾を尋る。小美濃の野上の人氏ありけり。莊司著實と吸れり。源平壽永の閉戦。東軍小従ひ。兵糧運送の支を掌り。始終その功あり。源氏一統の後鎌倉小召措れ。藤澤南御の邊に莊園三千餘貫を賜り藤澤東西八ヶ邸の目代を委せける。是より數世を累て今の著演大父ありけり。野上自著佐とありけり。後醍醐天皇の元弘三年閏六月の鎌倉攻戦。新田義貞朝臣小従ひて。又兵糧運送に

更とてはぬ。その功をたわむる。新田足利の確執。その程も世に又乱さる。恩
 賞の沙汰ももろく。刺南北両朝の争ひ。義貞朝臣の足羽宅陣殺の事
 少くも著佐をいと惜む。世に情を退隱と遂亦足利家の催促に従は
 ぬ鎌倉將軍の時より。所帯不易の御教書賜る。御事をもて。信て出
 る。その世に安を送りける。その子村主著種。生涯病多。官途成
 絶。只讀書を志す。戦國の稀多。博士とあり。好く人の師とす。
 素よりその名を食ふ。人不知る。その年六十。その子の史著演
 る。其著演の総角より。文と学。武と嗜む。心より父祖の劣ら。既壯年。及び此二
 親の喪。在る。三二年。その倦。常小の妻。晩稲の事。忠臣の草命の時
 る。孝子の終身の喪。あり。三。今在る。豈。目も忘れぬ。且。偉大父を。當田初
 新田殿。従ひ。南朝の。為。一臂の力。盡。今。足利一統の世。

此の世に。婿と。采利を。求む。法度。犯さ。不義の
 與せ。名利の。奴と。世に。恥と。論と。鎌倉の。管領。年
 年始の。嘉儀。景と。参。欲。其。方。權家。交。子
 とも。素より。饒裕。常。施。好。性。快。氣。尚。凶。年。値。と。わ
 る。倉廩。盡。粟。散。と。里人の。饑。賑。救。豊。年。亦。路。造。り
 橋の。朽。と。修復。と。衆人の。資。と。大。約。鄰。郷。近。郎。の。兵。糧。茶
 家を。焼。或。世。治。魄。饑。渴。通。或。久。病。臥。妻。子。親。便。着。死
 の。然。も。庭。弱。不。具。の。婿。親。疎。差。別。米。を。贈。り
 錢。取。せ。必。厚。惠。む。と。幾。人。と。境。と。隔。の。名。と。傳。せ。居。所。と。姓。名。と。質。も。向。い。ど。人。別。子。永。樂。錢。三。百。文。と。米。五
 告。と。ふ。と。あ。れ。

殊を取らせける。信でもその足とまを。而三回来る事ありとも。その折毎に推辞むる
 る形のごとく與へたる人竊小れを諫め。千仞の海に測るとも人の心の好む量
 正知らぬもの多し。名も徳も其本かそ。まの救とまのの。名も宿所も向付て
 東西を取らせると人の及ぶ所行なれども。その中か搦鬼ありて。然れども困窮せざる
 のも信々との誘へ。會するもの多し。その對酌あり。その兵者演ら
 せし和殿の意見見定ふよあり。俺も亦初より。その思ひぬ小あり。君も嗟来此食を
 受むの疑なく名を諂ぬ。居所を質も回す。その施行の義小違ひて人辱る
 の不似たり。その食悲人の素より論ず。その人由緒ありのされども。世小幸あり。飢渴小
 の勝せ。此の救を俺小とせ。根穿り葉を欲と素生を回す。その人のとる義を言は
 ば。我が義を言ふとも。東西と與へる名も回し。又とふの虚実あり。此も掛念を
 とる。縦その人告る。困窮者あり。その方より。此を受る。竊偷するやと

るは優美。俺の質素と上目と。奴婢を言々く使ひ。妻子の鹿布を被せく。
 身も亦疎食を啖ふ。義の為財を惜む。親の箕衣を兼し。只施を言と
 せ。一日も疎略せし。まのけれ。幸小と莊園小水旱の患あり。又年来俺郷の戦
 場小あり。その由軍兵の乱妨あり。福あり。あまの施を。年来を歴れ
 ざる。然とて東西の竭め。陽報われ。願ひ。天監あり。然れども。然れども。然れども。
 説諭せ。諫の感嘆あり。恥と悔あり。信でも野上其有演。海飽ぬ心地
 やまけん。有一日里の杜伎と。これ彼より召取へ。酒うち飲し。示さ。往元弘の
 擾乱より。近は比ま。五六十。年都鄙の閉戦絶。その戰場小戸を曝。野
 徑の茅萱と肥。その柳幾億方。名もけ。儂る。不違。就中不便あり。
 名もる。葉武者。雜兵。矢石。命を損。頭を捕。その亡殿。柱
 と還る。身方も亦罕。白骨。路傍。沙石。俱。朽。波達

今より亦る觸體の。たるをあるもの。取のりて。觸體一人を銀百文と
價を定めて買ひこむ。雨のあつた。おれに衣皆一説出た。言語弁一答も。
その目かたをよみて。這御中。その目かた。鎌倉近御箱根。以東。這首の溝。谷
那首の野邊。をよむ。觸體の病坊。大糞より。まらぬ。價より。買れる。
驛路遠く。小荷駄の尻を。赶かて。畑肥を。糞。送る。贏て。拵申。斐の。生活。を
るべし。そのあつた。引つ。びて。合共。信。退。り。け。是より。後。彼此。觸體を
り。ある。の。あれ。著。演。必。直。鈔。取。且。復。て。青。布。は。囊。類。も。復。觸體。揉。ひ。
此。件。の。囊。の。装。束。と。これ。より。那。社。伎。の。著。演。と。相。稱。之。福。老。長。者。と。喚。做
し。その。前。約。違。は。る。ま。た。數。の。作。善。と。感。と。き。需。而。心。む。る。の。日。毎。間
ぬ。る。の。け。り。の。觸體。の。數。一。百。級。及。毎。著。演。これ。を。瓶。小。飲。で。遊。行。寺。へ
送。り。遣。豫。て。寺。僧。と。相。謀。て。寺。内。の。圖。を。代。り。最大。なる。空。を。穿。り。その。觸

體を。瘞。して。大。凡。一。檢。可。の。程。一。萬。餘。級。及。び。著。演。則。之。圖。は。萬。人。塔。と。勸。做
る。石。塔。波。を。建。て。其。表。と。り。住。持。の。請。ま。う。て。大。衆。を。聚。合。經。を。讀。し。水
陸。の。施。餓。饑。を。修。行。し。且。其。所。料。を。寄。進。し。後。々。其。提。り。巾。ひ。り。後。々。藤。澤。の
十。里。四。方。の。あ。つ。た。は。戰。死。の。觸體。の。あ。つ。た。は。涉。獵。畫。け。の。後。の。然。る。東。西。誰。も。と。來
む。る。の。也。既。し。著。演。の。義。名。は。江。湖。上。の。高。く。遠。く。景。其。の。懐。ひ。の。近。は。愛
敬。せ。る。の。也。現。戰。世。の。後。傑。を。け。れ。の。天。道。盈。を。虧。と。の。理。の。漏。れ。あ。り
け。著。演。の。四。十。の。嗣。育。一。個。の。あ。つ。た。は。妻。の。晚。縮。の。の。世。の。暮。れ。く。ぬ
は。折。ふ。觸。れ。良。人。の。薦。め。て。子。孫。の。為。侍。の。側。室。を。娶。り。あ。り。と。の。著。演。の。心。せ。た
然。り。と。已。び。た。る。ぬ。る。不。由。薦。め。と。著。演。頭。を。ち。掉。て。の。然。る。と。せ
渾。家。の。如。の。あ。つ。た。は。その。妻。の。の。隆。女。の。是。より。口。舌。起。る。べ。し。著。演。と。去。の。箇
條。の。子。を。た。い。去。つ。た。の。め。れ。と。一。向。の。信。の。世。の。石。婦。の。あ。つ。た。は。男子。の。亦。子

胤るに。黄門と云く。徳る人必鬚髯を。足も脛毛の。稀之縦百婦を娶得て。
 夜毎の子種を時々も生涯嗣育り。唐山也。内官なるもの。法を
 割去る。黄門と喚做。那男子の子を免ふ。鍼經。明辨。又佛經。の
 を説いて。五種の黄門の凡て。かほ類を名けて。肩拂半釋迦。の。載。大般若
 經。在り。と。願ふ。俺身も黄門也。嗣の。過世。ん。獨渾家。石婦。七
 去の罪を。負せ。俺。俺。夫婦の宿願。空く。の。戻。後。六。家。亡。歎
 と。甲斐。の。益。と。推禁。後。の。所。分。頭。の時。陸奥
 州。信夫郡。関。渡瀬。の。間。里。小館。大六郎。英直。と。喚。南朝。餘類。浪人。の。妻。は
 名。母屋。と。い。け。原。是。新田。の。親。族。の。大。館。氏。の。支。流。也。父。祖。の。時。も。義。助。
 刑部。義。治。從。四位。下。父。子。後。軍。功。あり。然。れ。を。功。全。く。大。火。の。北。國。之。戰。歿。父。之。四
 國。也。是。より。以。降。英。直。の。義。治。の。嫡。子。を。け。脇。屋。右。少。將。義。隆。朝。臣。の

義隆傳卷一
 記義則
 小作又
 義隆傳
 義隆傳
 義隆傳

仕へ。累世忠義の先黨。の。小。脇。屋。義。隆。也。南朝。の。建。徳。二。年。の。正。五。位。下。
 相。模。守。の。任。せ。れ。後。天。授。二。年。の。從。四。位。下。右。少。將。陸。奥。守。の。任。せ。れ。陸。奥。の
 國。司。の。け。れ。當。時。這。地。に。在。任。し。再。後。の。兄。弟。を。左。少。將。貞。方。朝。臣。新。田。少。將。義。隆。と。共
 侶。の。足。利。方。の。大。敵。と。多。く。挑。戦。ひ。つ。る。年。來。も。麻。呂。程。の。後。龜。山。天。皇。の。元。中。九
 年。の。秋。の。比。武。家。足。利。氏。の。只。の。管。見。和。睦。を。請。勸。り。ま。り。時。の。將。軍。足。利。義。滿。の
 冬。大。内。義。弘。と。吉。野。の。行。宮。へ。參。り。て。北。朝。の。當。今。帝。後。小。院。と。南。帝。後。龜。山。天。皇。の
 御。猶。子。の。做。し。ま。る。也。且。ま。の。次。の。日。嗣。の。南。帝。の。皇。子。を。け。御。位。に。即。せ。ら。れ。と
 類。の。奏。し。ま。り。南。帝。を。御。許。容。り。の。年。閏。十。月。の。吉。野。の。白。玉。居。を
 坐。せ。し。嵯。峨。の。大。覺。寺。に。渡。御。す。り。北。朝。と。後。々。の。御。契。約。を。定。め。れ
 かる。月。の。初。の。五。日。の。御。讓。位。の。義。也。と。て。三。種。の。神。器。を。北。朝。へ。讓。渡。し。あり。し。ふ
 是。より。後。龜。山。天。皇。と。新。院。と。を。稱。し。は。徳。也。中。間。一。稔。を。歷。り。け。應。永。元。年。は。春

二月の廿三日。新院の先規の如く。太上天皇の号。猶且嵯峨の大
賞寺を仙居不定ぬのひけり。往る延元元年の冬。十二月廿五日。後醍醐天皇御
る。武臣足利者。氏皇本逆と避きあへん。吉野臨幸す。後村上後
龜山を愛ふ御世。更あひひて五十の七稔の春秋を歴る。今この時。南朝北
朝。兩天皇。稍御合體す。くれば。麻の如く。糸糸れる。世の是より。風波のたて。長雨
くる。ぐらんと。萬民。秋ひ。似む。武家。足利氏。をいふ。是より。南朝の公卿。武臣。執念深
く。憎て。刺太上天皇。山崎の皇子。を春宮。立す。を。前約。不叛。ざる。と
る。り。南朝。忠義の卿。相雲。客累。世義。烈の武臣。們。齊一。怨憤。りて。或。山林。の
隱遁。し。或。孤城。を。成。て。戦。殺。する。も。まる。の。口。は。新田。楠。の。世。を。境。忠。魂
義胆。武勇。智略。も。今。ゆる。小。施。を。甲。斐。の。義。隆。の。兩。大。將。の。見。籠。る。一。圓。這。地。を。退
樹下。漏る。雨。繁。く。ま。り。ぬ。る。新田。自。方。義。隆。の。兩。大。將。の。見。籠。る。一。圓。這。地。を。退

て。且。時。運。を。俟。ん。と。自。方。朝。臣。の。残。兵。と。百。名。あ。り。後。て。越。路。を。投。て。渡。る。義
隆。も。残。る。士。卒。と。三。十。名。可。得。て。武。藏。相。模。の。隱。れ。る。自。方。の。勇。士。を。取。衆。へ。と。り。
次。女。を。實。妻。を。旅。衣。五。方。七。名。主。役。を。引。り。張。の。月。の。笠。量。以。首。途。起。光。を。包。む
玉。鉾。の。み。の。真。き。す。み。の。濁。る。世。の。田。字。草。安。積。の。沼。の。あ。る。外。視。鬱。悒
く。ろ。鳥。と。牙。と。做。ま。ま。不。婿。竹。の。あ。の。里。を。夜。と。あ。り。潜。ひ。ま。さ。の。ひ。け。り。時。小。應。永。六
年。の。秋。九。月。は。あ。の。時。の。中。右。中。將。の。郎。君。五。才。の。あ。り。の。あ。る。陸。奥。を。遺。さ
れ。る。這。郎。君。の。母。上。の。亦。是。新。田。の。氏。族。の。大。館。左。馬。頭。氏。義。隆。の。女。弟。を。然。れ。る。郎
君。の。外。祖。の。大。館。左。馬。頭。兼。伊。豫。守。氏。明。也。當。初。新。田。贈。中。納。言。義。貞。卿。の
隊。小。屬。て。特。小。武。勇。の。答。の。り。惜。む。一。與。國。二。年。の。首。及。六。月。年。二。十。八。日。と。
任。國。豫。を。陣。殺。し。け。り。の。嫡。子。上。総。權。介。氏。宗。也。正。平。七。年。の。秋。九。月。年。
二。十。七。日。と。本。國。野。中。卒。也。二。男。大。館。左。馬。頭。氏。義。隆。の。初。名。と。弥。三。郎。と。の。ひ。け。り。



仁徳傳一車精

卷三三三三

此のちおと事々 奉るつひのけらまのすり 小後叙爵して後五位下右馬介の補任せられ天授二年北朝の秋九月軍功賞と
 して従五位上丹波進一左馬頭あるはる。尤は武略の達人と義隆朝臣と共伍陸
 奥在りて武家の大敵と戦を屢あり。天授六年北朝の冬比流矢の爲に傷
 られる。金瘡竟ふ命を絶て。年二十九卒せり。然れは氏宗氏義隆兄弟の天父と
 大館二郎宗氏主元弘三年北朝夏五月新田殿の隊に属し鎌倉を陣致せし
 父祖に忠義を執る。南朝の死を始終死力を盡す。勇將たり。由夢の世や
 皆是画餅とる果て郎君の爲に。後見せし者あり。膳郎君の母上は産後の
 病者肥立む。五稔前ふ世と逝ぬ。今亦父少將の弓折は勢究りて往方も定め
 落しぬ。綽訪ふの軒端の松風篁子の下は鳴く虫より外史絶てる。獨
 大六英直大館氏の庶流也。忠臣を貳ののりければ郎君生れぬ。比より英直を
 傳られて妻の母屋と郎君の姪母とせられける。只是の事ありて。義隆四十一の歳に

郎君生れぬ。俗に四十二の歳見ゆる子に二親の幸あり。俗に忠を義
 隆朝臣もその義の據りて。郎君の襁褓の中も大館氏を冒りて。英直を見も
 よとて乳名三英直の俗稱に因りて小六九と名づけしをゆひ。任まて由緒ある主後
 是の義隆武藏の折英直夫婦と召近りて。俺今自方鳩んと爲武藏を授て
 卦けも那首と敵地の安危を越す料を。救ふ禪見を推す便に
 此所爲然らも武運護く由り。父子一所の敷れる。遺恨のるべし。汝に這
 地の苗とて迹を埋め貌を。小六九守育よ。今番の伴あり先途を看
 たらん。遥小優て第一の忠臣とあり。宣示て家の系図と重代の
 菊一文字の名刀。英直預けぬ。是より英直の母屋共侶。小六九冊を
 姓名を變形貌を。関と渡瀬の間。字を楯鎖と。冷呂を。白屋を購
 未だ僅小膝を容れる。鄙語の坐く食へ。山も空に壁言諭漏れ。貯禄とを

系 三つね。英直の箭竹を磨給母屋の糸を繰りまぐる。細煙を立れも。東西南足
 りぬをうへ英直の一個の女兒あり。名を信夫と喚做し。小六九と同庚也。今
 茲五才あるなり。母屋が乳傳の口され比。乳母と字せし英直が小六九と
 府城を落る。女兒信夫が乳母の身の暇を取せ。今主従親子の。左右もと
 育つ。年稍七才あり。秋城隍祭の試樂の日。信夫のひより外。中を出入る。お
 されん。往方もあま。る。英直母屋の驚憂。日。麻生。も。彼此と送る。隈さ
 索の。音。小。據。も。る。心。義。の。為。小。捨。て。る。海。郎。君。の。恙。も。る。幸。い。と。い。ひ。
 深くも。海。原。世。の。あ。れ。小。六。九。と。英。直。が。家。子。と。入。告。て。苟。も。主。後。の。ご。せ。小。六。九。の
 成長の後。主。で。悠。々。と。素。生。を。知。ら。ま。る。と。い。は。れ。何。事。の。い。で。歳。月。を。麻。生。の
 隨。小。六。九。の。英。直。親。子。と。実。の。親。女。弟。を。い。ひ。と。時。々。信。夫。が。い。ひ。出。て。被。死
 袂。を。濡。し。方。穉。は。身。の。孝。友。小。買。い。と。る。也。英。直。母。屋。の。辱。ま。泣。下。を。い。ひ。嶋

通鳥。を。遣。る。瀬。い。ま。の。口。艱。苦。の。中。小。年。闌。て。心。永。も。既。小。也。十。年。小。あり。小。六
 九。年。の。稍。九。才。の。も。る。去。歳。の。春。より。英。直。生。活。の。暇。も。毎。日。習。讀。書。を
 教。ま。る。行。儀。正。く。の。せ。い。の。性。恰。利。の。れ。一。と。二。と。知。る。子。音。多。賢。才。の。も
 ら。人。權。せ。も。駭。を。と。又。れ。子。路。が。武。勇。あ。る。久。後。遷。り。は。れ。英。直。夫。婦。へ。飲。く。い。ふ
 つ。て。心。の。ほ。い。主。君。中。將。の。う。ら。け。り。五。松。小。も。る。も。る。御。本。立。息。を。返。あ。る。い。ひ。の
 里。の。蟄。伏。れ。て。ま。ま。の。い。ひ。も。然。と。て。訪。を。入。る。も。あ。る。其。方。の。空。を。左。も。右。も。眺。つ
 ぐ。し。つ。不。樂。の。存。り。今。茲。三。月。の。下。浣。微。吹。の。風。の。立。信。の。義。隆。朝。臣。の。年
 來。武。藏。相。摸。路。小。世。と。潛。び。て。舊。恩。の。武。士。勇。卒。を。招。集。し。と。い。へ。と。世。の。勢。小。後
 ひ。て。義。小。信。の。道。を。守。り。稀。に。怒。ま。の。毛。を。吹。死。を。求。る。と。い。へ。と。遠。慮。と。旅。宿
 痛。の。病。病。幾。の。起。居。自。由。も。所。り。も。あ。る。六。十。年。さ。る。比。陸。奥。の。戦。場。を。落。馬

廿とありける。今その撲傷の發りしをん湯治せ宜うんを。年来左右の後ひまら
 ず。船田鳥山高弁。江田堀口をこ喚れ。近臣總ふ五名を爲て竊小貌姑峯麓路
 多。底倉不卦をひて姑湯治をふ。その方さるも消息と輝詳ふ。然程ふ
 英直の音耗をる。左の右をさる。右の將の病着の撲傷の言をす。はる
 程多。瘡のぬらん然とも。左中不定の世。倘も温泉の相心ゆ。餘病發をひる。と
 臍を噓むとる。この這首をのをもさる。豫て仰置れる。脚説中違ふ。郎君俱
 一なり。の相摸不卦。御容體も同へ。今大さる。郎君外。存を
 る。小優とあり。尋思。母屋の。其の耳。不と。猛可。逆旅の。準備。敷。小六
 九ふ。あの里の。住。び。皆。共。侶。相。摸。多。親。族。許。赴。を。以。誘。て。却。里。人。ゆ。ほ。々。と
 よ。と。述。別。生。て。家。具。雜。具。の。へ。へ。家。も。售。て。船。纏。と。主。後。夫。婦。總。ふ。三。名。最
 慌。忙。し。首。途。し。相。摸。と。投。て。を。け。却。説。館。大。六。郎。英。直。妻。の。母。屋。と。共。侶。小

六九と扶掖てその日大路町二里七八里と走之。躬て宿を投め。稍三四日と。程小折も肆
 月の初旬ふ。天寒ゆ。暑。馬の尾管。追。蠅。も。千。里。を。ん。俺。も。去。向。の。を。
 長。日。小。睡。癖。は。く。早。百。合。の。花。珍。し。開。初。野。里。注。連。結。種。卸。却。を。踏。き。免。厚
 薄。山。の。新。樹。朝。曇。雲。降。ら。ゆ。や。盧。鶴。の。集。る。方。遠。く。な。れ。快。過。と。や。喚。子
 鳥。お。不。つ。ま。と。い。は。ま。の。支。婦。が。慰。む。尚。然。角。の。初。旅。路。日。數。累。て。武。藏。多。波。谷
 御。を。過。り。比。よ。英。直。猛。胸。膈。疼。そ。心。地。死。ぬ。と。い。を。る。然。る。皮。面。色。し。の。夜。假
 名。川。の。客。店。小。宿。投。り。初。母。屋。小。首。様。々。と。恙。あ。る。と。知。し。貯。藏。九。某。を。飲
 下。る。と。甘。か。此。の。效。驗。も。あ。り。け。れ。母。屋。の。小。六。九。も。驚。鳥。真。皮。て。日。よ。も。枕。邊。小
 を。足。方。不。待。と。背。を。拵。る。と。程。小。夏。の。夜。あ。れ。と。明。け。登。時。母。屋。逆。旅。主。人。良
 人の病着任々と告て醫師を徵めし。主人の躬て。這驛多。醫師許人を
 遣。刀。口。來。た。と。述。て。療。治。を。請。ふ。是。の。件。の。醫。師。ハ。且。英。直。の。脈。を。診。ひ。容

体と巨細不詳で却退して母屋のいさ。夫夫の月比大心勞あひる。とるや有らん。
 病疾心痛也。霜相露の恙あはれ。一町とも歩行を忌べ。瘡る目まで逗留と苦悶。
 雲看とらぬひそ。耳は遠方茶を吹咀し之復を来ぬとせ。然程小母屋の宿の
 泥爐を借りて茶を煎る。良人小母屋め小六丸も心を。側と去と慰め。六七日を歴
 程の英直の絶えん。病苦聊退。夜も日も呻吟をまじり。かまね一日の半碗の粥を
 啜るの毛けり。然る旅の悲しみの身小痺兒の杖並前向の肩と。瀟々一人の草枕は
 は旅宿の病臥さ。瘰癧と氣力の衰を。さふ就に雲つて。妻さ子さ心の憂い遣る
 方絶てるまふ。の身より目睡もせ。毎晩毎小竹杜鵑も不如歸と鳴るといへ。適もある
 れは陸奥より。遠く来ぬ悔し。神小生佛の啣願申。斐あり。夏樹植鎮守の
 神社へ兩個と迭代の幾回かの。熟言朝さ。夕さ。籬笆の雪と。花も長は日景。斑
 消て。立毛も。既。晦途。比鎌倉より。あつと。旅客們が。譚を。重

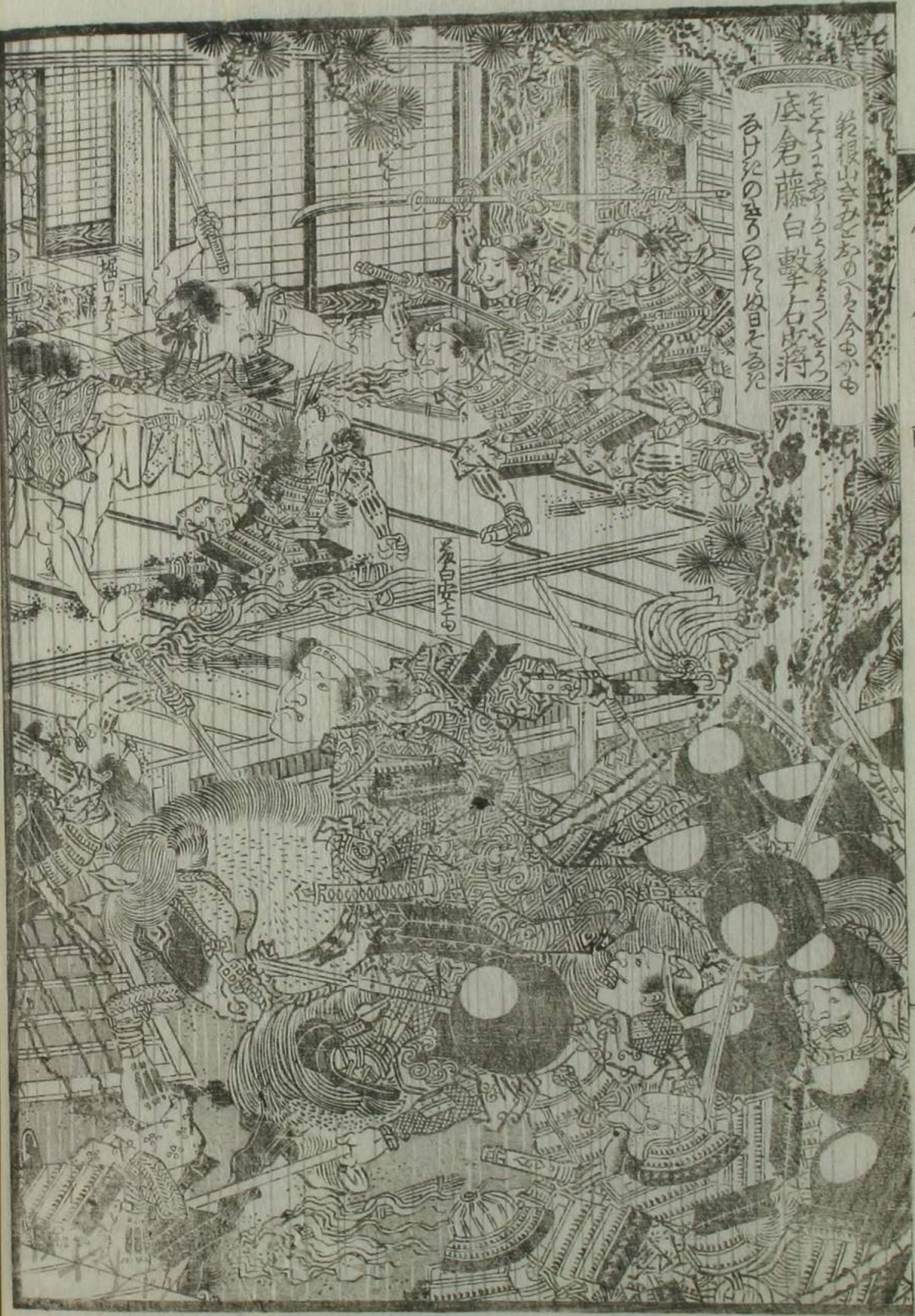
紙戸隔る。這方の夫婦の心とも。程那旅客のひけや。陽屋少將義隆主の
 年来相摸る。所親許深く潜びて。けし。知の。小近曾。恙あはれ。從者
 總四五名。俱て。親姑。峯の。麓路。底。景。赴。身。湯治。去。程。小。鄰。郷。の。人
 氏。藤。白。棚。九。郎。安。同。と。吸。武。士。の。不。七。少。知。け。快。推。寄。討。捕。れ。を。竊。小。夜
 撃の準備。その身の隊兵の。ぬ。土。兵。野。武。士。門。は。招。聚。之。百。五。十。名。迎。梅。雨。降。を
 夜。紛。れ。暗。號。と。定。め。と。推。寄。来。つ。義。隆。主。の。と。り。ま。浴。室。の。四。下。と。捕。籠。り。咄。と
 揚。る。用。の。声。姑。く。鳴。を。静。ま。せ。馬。乘。找。め。棚。九。郎。四。下。小。御。聲。声。苛。め。く。宮。方。の。落。人
 る。脇。屋。義。隆。快。出。鎌。倉。官。領。家。の。御。説。小。依。都。郷。氣。賀。の。入。氏。藤。白。棚。九。郎
 安。同。が。身。勢。と。以。向。か。つ。遣。逃。去。兵。們。と。呼。ぶ。声。と。共。侶。小。齊。片。一。競。寄。隊。の。軍。兵。色。倒
 一。戸。を。打。破。り。て。先。と。争。ひ。三。十。名。不。管。七。二。一。棚。入。さ。ひ。け。る。と。義。隆。主。の。近。目。の
 侍。船。小。二。郎。鳥。山。七。郎。堀。口。五。郎。江。田。高。柳。兵。彼。五。名。小。過。れ。孰。劣。也。臣。勇。士。の。必

死の覚期ふ此も騒ぎまゝの随ふまゝ大刀を抜發し細く敵を砍仆し駈散し
 撃も靡けて此と先途と戦ゆる烈し修煉の力大向ひと誰も免まじ真額利會
 車斫鎌の蔓をたると瞬間に三千人鮮血塗れて輾ぶりの兩個成て伏せり
 枕と並敷きれりゆれ奇なり視ま餘る大勢あれ物ともせし自方の尸骸と踏踏と嘯
 叫ぶ直攻の前進一自方小遮られ後止り皆う小笠前刺て透間々々射さける矢柄を今
 降る雨より敏く鳥夜小異めく鎧長刀の雲間と洩る月よりも隈るりける太書敷を突戦
 何山百果べとも見えぬけりあゝあれも衆寡の勢い入鐵石小あざれば然し一人當千此
 田鳥山江田堀口高柵們一個と七數人所深瘡を負ぬもければ是を以て近づく
 敵と引組んで刺違々雨夜の星とまらぬ一歩も去らば戦死せん得ん勇士之
 有任程も義隆主出居の杉戸を盾かり用心の為枕小建角弓合きて差詰り詰
 敵十四五名射て仆し前種も竭んとせ折近臣們的皆敷れ六誘然と腹に

切りと獨語臥房を投ぐる藤白が昆弟えけ由子勇傳次佐と見て鎧を拵
 跟る来り耶と声被て刺せし義隆閃りと身を反し蛭巻左の小冊へ逆透さるる
 抜合する及頭とささき擲らぬ寛達を勇傳次の胸前丁と無事申れて苦と叫び声
 と共仰反仆れて息絶すその間も義隆主も一室小退れて腹掻切てを俯の最取
 期本月廿四日夏四月の真夜中比のふし七享年四十九歳とすえ痛みの世は名
 將南朝股肱の武臣ありも三年の大義時至り命運其処を竭め藤白連が鈍
 軍慮を攻惱されて死腹を研るるを要斬る然程藤白連九郎安同の隊勢小下
 知と脇屋殿の死首級を賜り存る近臣五名の首級も知るのけしその名を尋ねて
 一箇々小牌を付首級に斂め相推して次の目管領の御館へありて任るとすえわが
 當主鎌倉の管領足利満兼朝臣の孫斜るるを斂めひて射て首級実檢あり却
 棚九郎不宣せり義隆の朝敵也且當家累世の讎言れ且裏小他陸奥に落

依文傳第一輯卷一

乾根山きみとありへる今もかめ
をくろくちあつちあつちあつちあつち
底倉藤白撃手右少將
るけたのきりのたぬ目そるた



又白安よ



高柳兵庫

有像集貳

十九

あつとぞえー比る。まづ往方と索ひて久く知るより多し。小安同輔と討捕てまわす
 甘白神妙の義京師へ注進及ぶ。日室町殿も大々満足を思召す。酒這
 圓の功賞として。安同の氣賀底倉二荘を賜ふ。又隊兵中功あり。感状を取
 へ。今より本府外在任して。忠勤を励むべし。とみづから仰下されければ。棚九郎の身餘
 る恩を拜と退出けり。然るに又その次の日。義隆主役の首級共。由比の濱濱邊小島に
 一。咱目前へ来て。その為体の任を。む。野間の内海に義朝主の骸を
 又その孫頼家卿の伊豆の修善寺に絞られ。這回底倉にて。義隆主の骸を
 皆浴室に懸れ。源氏の大將達。三箇多。浴室に。死所小あひ。不思議の
 あ。寝て。説話。相宿の外。哀れを知。自。一調高。訛声。雲時。旅宿の
 真愛遣。人。食然。多。と。心。嘆息の外。母屋。初。頭。願。擡。良人
 と。俱。敬。耳。裏。胸。の内。や。苦。泣。泣。声。を。下。と。楚。と。嘯。啼。る。袖。の。涙。の。玉。露。散。り

山とて。知。小。六。九。義。我。小。聰。快。世。の。轉。來。春。と。捺。る。憾。も。英。直。の。堪
 ぞ。怒。歎。送。恨。の。腸。断。は。忽。地。胸。塞。て。一。声。高。く。叫。び。血。を。吐。く。程。仰。さ。は。小
 撞。と。倒。れ。母。屋。の。小。六。九。も。あ。も。什。麻。の。と。敬。馬。駢。抱。起。ら。呼。活。声。は。主
 人も。走。り。來。り。共。侶。勸。と。人。と。醫。師。の。宿。所。へ。走。り。來。り。茶。を。徹。り。樹。攪。由。出。る
 けれ。や。英。直。の。や。や。れ。か。へ。と。主人。と。醫。師。の。飲。む。速。て。け。の。氣。を。ぬ。す。枕。小。就。と。も
 と。左。も。右。も。本。復。の。心。の。ぬ。く。ぬ。く。睡。れ。ぬ。隨。小。の。通。宵。ひ。と。久。後。の。深。念。と。ま。右。少
 將。の。御。武。運。微。く。敷。れ。ぬ。と。小。俺。亦。あ。命。終。誰。と。郎。君。守。無。況
 類。育。せ。新。田。の。餘。類。と。知。る。會。敷。捕。と。あり。あ。と。一。日。も。宿。を。致。し。ぬ。る。た。ま
 る。い。の。せ。せ。ゆ。ゆ。藤。澤。野。上。吏。著。演。と。喚。れ。最。饒。裕。の。御。主。の。世。の。有
 る。家。傑。と。義。守。る。城。の。如。く。悪。と。瘴。む。と。仇。の。若。く。弱。を。資。け。衰。る。と。憐。生。平。に
 施。と。好。と。財。貨。と。惜。ま。その。性。と。狭。氣。あ。り。勢。利。小。隸。を。權。家。の。媚。と。御。向。小

鄰郡近御る。戦死の鬪體一萬餘級を集めて塚を築き好事を修行し慈惠の
 不まれえ。其言をいさるるも。知るも知るも人ものる。今の世の七小六殿を託すもの人あるも亦ある
 べし。いさるるも。俺の年来縁きけね。まご二面の文のあはれ。や俺身の死後に至りて書き寄
 せ。其のいさるるも何と云ふに樹もね。いさるるも。いさるるも。左の右の尋思は。僅小
 便點のいさるるも。いさるるも。詰且小六九毎屋も側をぬ折辛しと身を起し。いさるるも。長身は白
 紙の書状のいさるるも。巻篋をいさるるも。固く封皮をし。墨筆の筆を抜令て野上史殿をいさるるも。
 新田の餘類館大六郎英直と云ふを標寫し果し。息吹をいさるるも。封状と枕の下へ
 布んとし。いさるるも。撲地と臥しけ。いさるるも。危は病病より。苦し毎きあはれ。

第二回 遺訓に依り賢童踏跡を知る
 旅櫬を迎て義士母子と憐む

却説去の朝小六九又只親の病着の平愈を祈らんと。鎮守の神社へまゐり。いさるるも。
 英直の母屋と呼て杖起させ。伏枕を罪れて權へ四下のみをいさるるも。再側小招
 近つけ然らるも細りし声と低く。いさるるも。渾家の何と云ふらん。右少将主従の底倉をいさるるも。いさるるも。
 その既小分明なれ。宿念六日の昔浦ありたり。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 任ていさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 樹を伐彈し。草をいさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 と。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 川の驛より路程遠くも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 曩歳俺少りし時。鎌倉近く潜ぬ。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 なりて藤澤小旅宿し。且逗留あり。比那其者演と邂逅て。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 意中を諦せし。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。
 あら。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。いさるるも。

叛くものありて俺死るが柩と共に小六殿も俱くまらせて各々那首へ赴かぬ故の故の
 病苦を忍びて著演人與る書翰一通寫り措かす那宿所不到り日あるまじく主人は
 遍与らるる由らんと疑ひあり。ありとも小六殿の主君の皇子ありける著演もるは匿そ
 是まのまじく俺們の兒をのりて勿論又小六殿もあるまじく襦袢の中より入の被る育
 まらせりければ只俺們を突の父突の母とのまじく二親のうへに新田の餘類の
 依正のまじく告げば知らば痛死の限りもあらざる九歳あるのあへ世を潜ぶ身情
 由のまじく知らせる後々の用心の備えの不覺と攬せぬまじくあつたの義をあらぬの却介
 後の小六殿の年十五六ありける竊の素生と告まらして。御宗大殿右少將の送る
 系圖の一卷菊一文字。太方の名も。その餘の東西も送る。遍与らるる然りと死
 渾家の功績良人の代り忠貞あり久後漏心切りのこれとを方寸に収めて洩しぬる
 とる返り今般の遺言一句毎息迫ても病苦不屈せる忠義の魂枕邊近く措せ

たは行果衣の裡よりして件の三種とら出さして封書と共に遍与らるる母屋の涙のく
 且つ尉の難後事のこれと云々と汲てて。膽向心細輪の田井のあまじく
 ぬせあるていふるる身の往方別れ悲死生死の海なるの岸とる。底里のく千仞
 成ゆる歎歎の俯論も。思ひ久し頭と擡て宣ふより米比目足忠義の為なり。理り
 ぬりもるるをよあるては。然しも覺期する。假寐する。病者も擡り加
 えて底倉の凶計の洩せし。其餌もまじく世の長くと思ひぬる。みづる棄
 るおゆるる。果敢るる浮世の口順も死と千年を歴て生る。一日を勝る。このれ
 ありのふそ。及ぶるも将息して。親育君の死を死んと思ふ。心より死る。年来の
 氣憤ふ似けは。返らぬを思ひぬる。思ふ。知れぬ。信まらぬ。在
 ら今茲の九歳。折中を尉めて親の為なり。世のありぬ。火の葉石の盡
 処。京師のそ。欽直愛のなる。絶てぬ。衣流る。親子の縁。かき。脚つ

英直推林杓め。益る死詩言人中少くも。信夫がうの不便と。思ふぬわねども。中心臣を
 親とも忘る況幼穉は女の子のり。今はあま暇あはら。哀別離苦の悟道の捷徑ま
 望を後世の念と。俺樂んで死を俟んぬ。主君の讎言を藤白奴を敷きこみ。この尺貫
 泉の客と。うらやみ正の朽をく。九の世と。思ふとも。忘るより。また死さるるも。定業をなす
 丸のひやせぬ。鳥の快の三種を取。瘞め。と。励されて。わらわの妻のせやく。引あはる。行
 袂へ。舊の如く。東西より。飲れて。引結び。中帯被る。韓組。短のぬれて。短く。長に別れを
 後。知る言の端。表れて。燈火。滅んと。光りと。増せ。例似。英直が。病痾間の
 やと。書せ。送訓を。健全氣。然程。英直。その。夜。艾より。胸痛。の。病。苦。め。劇。く。を。
 又。血。を。多く。吐。け。母。屋。小。六。九。も。共。侶。胸。を。苦。し。直。愛。同。湯。茶。を。あ。く。唐。も。英。直。
 毒。菓。水。粒。共。の。下。り。次。の。目。の。腫。唇。の。一。声。叫。び。呼。吸。絶。け。り。悲。あ。へ。り。豫。より。
 思。ひ。の。り。一。の。あ。れ。ども。又。今。の。り。の。小。覺。見。母。屋。小。六。九。の。哀。傷。悲。泣。の。壁。言。る。小。物。を。あ。へ。り。泡

沫夢幻の浮世を。狭ま。生死流轉の苦海を。漂い。ま。ま。果。ぬ。旅。衣。を。經。字。衫。を。脱
 更。て。往。て。返。ら。ぬ。人。の。數。入。り。人。を。留。め。難。妻。の。孤。雁。の。伴。侶。後。れ。子。亦。狙。猴。の。林。木。の
 離。れ。至。悲。斷。腸。の。血。の。涙。呼。び。安。も。ち。な。り。の。花。塗。主。枕。の。白。粥。の。枕。は。送。る。一。年。も。さ。め。り。
 果。敢。る。死。夢。の。跡。を。見。れば。身。ひ。ち。ち。か。る。難。に。知。り。白。の。緯。訪。ふ。者。の。名。の。り。亦。只
 逆。旅。主。人。の。正。首。の。慰。安。を。不。慮。か。宿。致。せ。一。夜。より。死。支。子。の。長。は。病。苦。者。竟。か
 瘡。り。ぬ。れ。む。と。這。間。で。身。ま。ら。ぬ。ひ。ち。ち。後。悔。も。推。量。あ。れ。不。便。の。み。ち。も。亡。骸。と
 本。驛。小。六。九。と。わ。ら。ぶ。地。方。の。法。あり。私。の。執。措。め。り。驛。長。の。指。揮。を。京。で。左。右。も
 つ。ま。り。ん。成。り。あ。ら。り。近。り。り。由。縁。の。方。ざ。る。ど。あ。る。そ。の。人。許。亡。骸。を。引。と。せ。と
 り。ひ。め。り。驛。長。小。報。の。及。び。ぬ。ぬ。あ。る。任。せ。ら。ん。の。も。と。母。屋。の。涙。と。め。め。り。の。趣
 あ。ら。ゆ。ゆ。り。一。河。の。流。を。汲。む。も。一。樹。の。枝。陰。を。寄。る。の。も。比。目。是。他。生。の。縁。と。と。世。の
 い。へ。とも。殊。ゆ。る。あ。る。人。の。病。中。より。大。き。く。な。る。厄。會。あ。る。り。作。り。る。甲。斐。も。あ。る。這。首。を

外なる洩しぬひそと生口さうちみく小六丸の落る涙と振絞は頭と擡て貌を更え仰うけ
 ちのひの脇屋殿の陸奥へ落させぬ比へも俺四五才許る時ゆめ有つらん果ぬ
 夢の心地と人の噂あやうき親の故主でせしと知ざりしを悔けれ今ゆめいひるま
 るらるる答々公のうへも恙もなきも那処へもあらず俱に戦死まぬ左ても右ても存命さ
 ぶ本意不愜せぬ人の救生浮込りう俺身もあらず恨まれぬ故主の讎言敵那藤白を
 討捕り神霊を慰めぬらん且く俵せぬひと腕と扼ま母屋の吐嗟と推禁めぬよ
 声高一人のやうん獅子の生れその目も百獸威伏の勢ひの蛇蝎の僅一寸する物も吞ん
 と欲まるる氣あつとゆひの仇のうへも似る年あつて違く讎言を敷んとゆめと叱るあわね
 ぬ潜れぬ世と潜る身不出きての華ひるる及ぬるを起て氣色と人の悟らるる親
 二身さ亡ふべし不覚ぬゆめゆめと徹られて小六丸の過言をたゆめけん誠の然るると
 忘るるも口と鉗まら然程ゆめその夜さ母屋の主人の儲賃と醫醫師の謝銀極の價

行轎の損料もゆめゆめ隨不送る還て後さりとゆめ候とるる青冬夜の向明とま
 る比の諫て宿より詭ふ兩個の轎夫の時と違む无常復輿をうち肩拭て来々
 徳々と呼門也主人の恥と指揮と極と擡起さるる件の復輿の無せかとは是より
 先小母屋小六も早飯と薦られて存一膳小向ひも徳は折ぬ女者も進ませ身装
 ち行累の復輿の附け親子の駝ひ草鞋と引提りゆめと主人并小家は内
 る女婢們も別れ告る口誼も胸の塞り輝暮く哀情もろろろ程ゆめ夫の
 明て茂林とさるる鳥の声も常ゆめゆめ心裏哀しく涙の路のうきも去向の僅お坂
 東路一里二十里不足るゆめ最も日長比るれゆめ亭午ふるる復輿の件
 引添ふる藤澤の御來まけり世不知れ野上の宿所の隠れあべうもあられを母
 屋の復輿をうち卸さし故意後門より找入る西三声呼門程の執次の若黨るゆ
 べし応と答て立出たり登時母屋の小腰を折めて奴家の這里の御主人の親類甘甲が

妻子の密通を知らぬ。尚総角を拙郎と俱し。とある。この事
しゆ。この事件の執次入ら。ある。果て退治し。且て又かき。誘ふ。と先立。客
房へ案内せり。當下母屋小六九。後門前。送り。措て。其真の極。成る。その身
引れて。その。客房へ。赴け。娘。少。女子の。茶を。看め。有。一。程。
著演の。執次の。若。當。の。信。と。生。口。と。獨。あ。る。か。訝。と。俺。他。御。親。類。を。何。
人の。妻。ある。けん。あ。る。が。客。あ。る。と。あ。る。の。う。然。と。氣。なく。且。客。房。小。案。内。を。せ。て。茶。
看。め。せ。る。と。ま。る。程。の。遠。く。袴。を。穿。つ。一。刀。と。腰。刀。と。出。遇。え。つ。折。隔。亮。の。隙。
との。間。に。規。う。ま。る。と。認。ら。ぬ。婦。人。今。對。面。と。詳。し。問。ふ。あ。る。ま。い。い。ふ。と。俺。疑。ひ。と。解。し。
あ。つ。と。と。め。い。け。れ。咳。せ。る。客。房。小。案。内。と。叔。母。屋。を。對。ひ。て。の。事。某。則。野。上。史。著。
演。で。い。え。と。を。訪。ふ。い。れ。親。類。の。妻。子。を。報。ら。れ。し。と。當。面。回。答。せ。れ。ば。今。
ま。對。面。せ。し。と。ま。り。れ。ば。何。処。の。人。と。ま。る。ん。聊。疑。惑。る。は。願。ふ。名。告。せ。あ。へ。と。

つられて母屋の四下とら。ん疑ひの理り。人傳の生口と世お憚りのよもは。と无
礼とら。い。ひ。る。と。名。告。を。信。ら。ぬ。の。美。を。察。し。あ。つ。と。と。ま。る。著。演。領。と。を。
然。つ。と。の。あ。つ。と。ん。俺。家。の。奴。婢。們。の。心。腹。の。め。あ。れ。洩。す。と。も。あ。つ。と。況。四。下。に。人。
あ。つ。と。示。し。あ。つ。と。め。い。け。れ。今。ゆ。へ。匿。む。と。あ。つ。と。あ。つ。と。と。膝。を。找。
耳。か。う。奴。家。の。年。來。陸。奥。の。楯。鎖。の。里。小。僑。居。せ。館。大。六。郎。英。直。が。妻。小。七。母。屋。と
吸。ま。の。は。の。那。地。の。開。戦。敗。れ。折。良。人。英。直。故。あ。る。主。君。小。別。れ。を。れ。り。以。來。あ。ん。在
処。と。知。り。ま。り。け。れ。あ。つ。と。不。樂。て。五。輪。あ。ま。り。を。過。せ。今。茲。相。摸。の。片。山。里。小。御。座。を。ゆ。え。
い。と。主。君。の。見。參。入。と。と。め。い。け。れ。奴。家。と。今。茲。九。才。獨。子。小。六。を。推。て。猛。可。小。逆。
旅。の。准。備。と。整。へ。相。摸。路。と。投。て。急。ぐ。程。小。武。藏。の。假。名。川。を。來。つ。と。の。夜。より。こ。こ。や。良。
人。の。胸。痛。の。病。者。あ。つ。と。臥。て。意。あ。つ。と。假。名。川。の。客。店。小。逗留。の。日。數。を。其。首。小。東。の。
晦。近。く。あ。つ。と。比。世。の。風。声。は。隱。れ。も。る。主。君。の。う。へ。小。夏。の。け。り。と。あ。つ。と。良。人。の。仰。天。是。より

ひろ元弘功ありといふも義貞亡きをゆひ久世を憤り退隱せしより不肖の俺身に至る
 まて出て足利家の仕さるに那英直のまじりしを知らざるやと知るやと左に右のあれ
 今この母子を家にお留めて羈旅の難義を極むる未見の知己の背くべし父祖の遺念違
 ふお似ら嗚呼介さると立地の尋思する母屋を對して自今示談せられる辨の趣実由
 あり館生といふや時天地の柱言義を結ひて竊の異姓の兄弟にわづらひけるのこの這御
 程遠く仮名川の旅亭に病々身まわすまでと告申来りけり只一たびも訪ねて
 長髪別れぬるふる送憾を惜しめ非如自筆の書翰をととの妻の子の訪
 佈をのぞく強面ものま死況その終の臨みて恁叮嚀する一通と送されれば今も疑
 べものわづらひ此も介意あるけりや身母子のうへに著演が身引受て生涯疎緊
 去るに杖と子息を何処に送らぬか詰末を初も側引著措をせで俺も
 隔のまゝと世に憑り美引れる人の誠を又袖濡らし母屋の鼻をうちまて年来良人の

疎遠なりと昔契や違はせぬといふ美一は心ハ歎息中の歎息を人の為におも
 是れ優る追薦の亦あやうもあやう小六も極成らして後門前へ送し措かば辨恁
 恁と報知せぬと辱くもいひらん快致はるゝといひて立を推禁せぬとやと月雲時
 ここ這首お坐せよ俺も礼服の更ぬて俱に極を迎へて辨せりて説示して堂々つ鳴
 らせ一個の若黨志しん邊くまはける側は招近つて汝等もあつた後門
 前にお来客あり然角ある俺任をさう成る旅櫛へは日假名川の客店を身
 まるの俺親類の亡骸を今俺出て迎へる汝は老僕と共侶に在客四名許る俺
 任小恁々と報て極成れり快々せよと急と追を遣り母屋を對して自今せられ如く
 某の奥へ退る御母子来意の趣を荆妻の中知せり衣堂を更ぬて極送這首迎へ
 きて且く允らぬと辞と奥へ退れり登時著演の妻の晩稲の母屋親子の縁由を
 説示する件の機密ありと英直を年来の義兄弟をこの知と猛ら服小衣

秋まのころみちのぬらひせいの
陰徳總一理禍福唯自求
莫道天公遠方寸任悠悠
かゝる一子ふかき世やうき



虎因老納言
普賢寺
空城記
義澄朝紳

小六

か一ね

あたのぶ

有像第三

奇人難屢見休將仗
稱羨相十秋慕范君



かゆ盛

北九

目録五七五ノ後

更さらに母ははの身みも衣裳いせうと更さらに復また客房きやくぼうを出でて誘まねと云いふ母屋ははやと俱ともに後のち門かど前まへへ赴むかひ
 程ほど母屋ははや先まへへ走はしりて小六せうろくは若わか者もの演あそぶ美み引ひて今いま柩ひつぎを迎むかひ緯いとの首くび尾おしを告つげふ小六せうろくは
 感あは涙なみだの進すすむ骨ほねを柩ひつぎに離はなれて去さる若わか者もの演あそぶ美み引ひて今いま柩ひつぎを迎むかひ緯いとの首くび尾おしを告つげふ小六せうろくは
 痛いたみ死しの心こころもあはれ然しかれども哀あはれと云いふ親おやの懸かるあはれな心こころもあはれと云いふ愛あいの後のち果はた
 揣さふも亦是また孝こぞと佳い人ひと猶なほ子のどと礼らい記き本文ほんぶん見みえられけり云いふ若わか者もの演あそぶ美み引ひて今いま柩ひつぎを迎むかひ緯いとの首くび尾おしを告つげふ小六せうろくは
 亦また子こと云いふ親おやの養やしな育やしなせむと云いふ後のち果はたと慰なぐさめられて小六せうろくは恭こうしく拜かがみ見みえて時ときの不ふ祥しやう也なり
 止とま若わか者もの演あそぶ美み引ひて今いま柩ひつぎを迎むかひ緯いとの首くび尾おしを告つげふ小六せうろくは
 慳けん入いりませは是こゝろの下した若わか者もの演あそぶ美み引ひて今いま柩ひつぎを迎むかひ緯いとの首くび尾おしを告つげふ小六せうろくは
 関せき卷まき敬けい驚おど奇き俠げ客きやく傳でん第一だいいち集しゆ卷まき之の一いち終しゆう

関卷敬驚奇俠客傳第一集卷之一終

